

ローバル」を冠している。惜しむらくは、本書の中でこの「グローバル」という言葉遣いについて、イスラーム金融の実践がグローバルに広がっているということ以外に、明示的な学術的説明がなされていないのだが、それを差し引いても本書は「グローバル・イスラーム経済論」の志向性を共有しうる先駆的かつまさに「グローバル」な研究成果だと評価することができるだろう。

<参考文献>

長岡慎介 2017「イスラーム経済論」私市正年・浜中新吾・横田貴之(編)『中東・イスラーム研究概説——政治学・経済学・社会学・地域研究のテーマと理論』明石書店, pp.86-95.

(長岡 慎介 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科准教授)

アブドゥルガニー・アブルアズム『ガニー・ザーヒル アラビア語辞典』(*Mu'jam al-Ghanī al-Zāhir*) ガニー出版 2013年 3589頁 (+ intro. 47頁、図・写真 54頁)

現代アラビア語研究および学習ツールとして大いに活用できる、使い勝手の良い辞書が登場した。アラビア語-アラビア語辞典の『ガニー・ザーヒル辞典』(以下『ガニー』と記す。「ザーヒル」は形容詞で「輝かしい」の意味)である。モロッコ出身の辞書学の権威アブドゥルガニー・アブルアズムによる総ページ数3589頁(+ intro. 47頁、図・写真 54頁)、4巻本の大辞典である。

アラビア語の辞書については、アラビア語-英語であれば、『現代アラビア語辞典』(ハンス・ヴェーア著)が定番のツールとして知られているが、学習が進むとさらにアラビア語-アラビア語辞典が必要となる。日本で普及しているものを挙げると、カイロ・アラビア語アカデミーによる編纂の『ワスイート』(中辞典)や、アラブ連盟付属機関のALECSO(アラブ教育文化学術機構)による『アサースイー』(基礎辞典)、そしてレバノン出版、ルイス・マアルーフ著『ムンジド』(1908年初版)を底本に現代的語彙を増強した『現代ムンジド』(「救い手」の意味)であろう。『ワスイート』については、日本で言うところの『広辞苑』に相当する標準的辞書として、1960年の刊行以来、アラブ諸国内外で不動の地位を確立してきた。評者も参加した「高野辞書プロジェクト」(長澤榮治氏を中心としたアラビア語-日本語辞書の編纂プロジェクト)の底本の一部にもなっており、我が国における『ワスイート』発展型の今後の展開が期待されている。

こうした日本におけるアラビア語辞書の使用状況の中、時はネット時代となり、語彙の探し方も大きく変わってきた。語彙の意味をアラビア語の検索エンジン(グーグルアラビア語など)で調べると、「語義」を意味する「マアニー」(<<https://www.almaany.com/ar/dict/ar-ar/>>)というサイトが必ずヒットする。そのサイトで提供されている代表的な辞書は、先の『ワスイート』、レバノンの文人ジュブラーン・マスワード編『ラード』(「先駆者」の意味)、エジプト人言語学者アフマド・ムフタル・ウマル編『ムアースィル』(現代辞書)、そして今回扱う『ガニー』の前身(ネット版では、『ガニー・ザーヒル辞典』ではなく『ガニー』のみのタイトル)である。中でも、母音記号の正確さ、語根/コロケーション/動詞と前置詞の関係に関する情報、用例の質、という外国人学習者が特に必要とする要素を満たし、使い勝手の良さで群を抜いていたのが『ガニー』であった。しかし、先の3書が、すでに出版されている紙媒体の辞書を元にしたデータであるのとは対照的に、『ガニー』については全く情報がなく、刊本の存在の有無が専門家の間でしばしば議論になっていた。そしてついに、その辞書が『ガニー・ザーヒル辞典』というタイトルで2010年に出版されたのである。

それではまず、『ガニー』の形態と基本情報について簡潔に述べよう。ハードカバーの4巻本であり、各ページ2段組で総ページは冒頭で述べたように3589頁である。1巻目は、序文 [intro. pp. 5-37] と例証の典拠リスト [intro. pp. 39-44]、略記・配列の説明 [intro. p. 45] に始まり、「アリフ(أ)～バー(ب)」をカバーし、2巻目「ター(ت)～ラー(ر)」、3巻目「ザイ(ز)～カーフ(ق)」と続き、4巻目「カーフ(ك)～ヤー(ي)」で完結する。各巻末に地図や図絵が数ページずつ付いているが、活用表や韻律表、ハムザ表記のルールなどの付録はない。収録語彙数は65880語 [intro. p. 11] で、これは『ワスイート』(見出し語〔語根〕約

7000、語彙数 43027)を大幅に上回る。またガニーが強調する生きた例文の重要性 [intro. pp. 9–10] を反映し、クルアーン、ハディース、古詩のみならず、現代文学からの例証を始め、用例がふんだんに盛り込まれている。その数は、21028 例文(うちクルアーン 2020、ハディース 367、格言・ことわざ 297、作者に帰する例証 7354、その他例文) [intro. p. 11; <<http://www.alghani-azzahir.com/arabe/>>] に及ぶ。配列は後述するように、語根方式ではなく、綴り方式(アルファベット順)による。また魚や動植物、民具など、質のいい挿絵もカラーで約 1000 あり [intro. p. 11]、語義だけでは分かりにくい単語の理解に補助的な役割を果たしている。

出版は「ガニー出版」となっており、共編者や協力者の記載はなく、アブドゥルガニーによる単著としての刊行である。シャモア色の上質紙を使っていて、目に優しい印象を受ける。ちなみにこの種の紙質は、出版文化の興隆が著しい湾岸アラブ地域などがよく好むものとして知られている。一方で、カバーの著者名にマグリブ書体を使っているあたりは、少しだけモロッコ・テイストを出している部分と言えるだろうか。価格はオンライン書店 neelwafurat で 130 ドル、モロッコ国内では 1000 ディルハム (15000 円) ほどなので、国内外でさほど変わりはない。カサブランカ、ラバトを始め、モロッコ各地の書店で販売しており、アラブ諸国で開催されるブックフェアでも入手可能となっている。

辞書のタイトル『ガニー・ザーヒル辞典』は、著者であるアブドゥルガニー・アブルアズムに由来する。アブドゥルガニーは、モロッコ・マラケシュ生まれ (1941 年) の辞書学研究者で、フェズのザハル・メフラーズ人文学部(スィーディー・ムハンマド・イブン・アブドゥッラー大学人文学部の前身)ムハンマド・イブン・アブドゥッラー大学でアラブ文学を専攻し、その後 1977 年にソルボンヌ大学(パリ第 3 大学)へ留学、学位論文「イスラーム思想と女性」で博士号を取得し、さらに 1993 年にはカサブランカのハサン 2 世大学人文学部でも博士号を取得している。モロッコ辞書協会を 2002 年に設立し、協会長として就任、研究ジャーナル『辞書研究』の編集長などを務めてきた。現在は、カサブランカの同大学人文学部で教鞭をとっている。著作には『アラビア語—フランス語 小辞典 (2 歳～6 歳児向け)』(1993)、『動詞活用辞典』(1997)、『学習辞典——原理と方法論』(1998)、『食彩と彩色』(アンダルの古典を校訂、2003)、『宗教用語辞典』(2005)、『人権用語辞典』(2008) などがあり、経歴や学術的成果からは、ガニー自身の学習辞典に対する強い関心がうかがえる。

こうした辞書学研究的結果が『ガニー』である。2002 年に、サフル社(1982 年にクウェートで設立。アラビア語をベースとするソフトウェア会社)から CD-ROM 版で発売されたバージョンは、紙版の前身と位置づけられる。ネット上の『ガニー』はそのバージョンが公に利用可能となったもので、紙版への展開においては語彙数や例文の面で大きな改善・増補がなされている [intro. p. 9]。

ここで少し視点を変え、辞書の刊行が可能となった背景に注目したい。先述のように出版社は「ガニー出版」であるが、奥付・序文にはドバイ首長の名を冠する「ムハンマド・イブン・ラーシド・アール・マクトゥーム協会」の助成による出版であること、そして謝辞が記されている [intro. p. 32]。こうした湾岸諸国による援助は、現代アラビア語の変容と発展を考える上で極めて重要であろう。今日、大型プロジェクトと位置づけられる知的生産の多くは、湾岸の豊富な資金源と人材獲得の動向・戦略に支えられた「湾岸求心力」によって、湾岸諸国を舞台に進められている。これは、イスラーム研究やアラビア語研究をはじめ、長らくエジプトやシリア・レバノンを中心に展開してきたアラブ世界の知的発信力の力的バランスが、湾岸地域の勃興によって大きく変動していることを意味している。

例えば、ドイツ人東洋学者アウグスト・フィッシャー (1865–1949) の功績を継ぐ長年の大型プロジェクトとしてカイロ・アラビア語アカデミーが進めていた『通時的アラビア語辞典』編纂 (1965 年にアリの項目の一部だけ刊行) は、今やシャルジャ (アラブ首長国連邦) のカースィミー首長の財政的支援によって新たな段階に入った。他にも辞書学に関しては、カタルの『ドーハ・通時的アラビア語辞典』編纂、さらにドバイの『ムハンマド・イブン・ラーシド・現代アラビア語大辞典』編纂など、今後の新たな展開と知的活動の発展を強く期待させる大型プロジェクトが多い。さらに、こうした湾岸地域を中心とする知的共有の場の形成は、それまで意識することはなかった現代アラビア語の地域差 (特にマグリブ地域との偏差) を人々に認識させることにもつながり、「現代アラビア語は多様化か均一化か」という新たな課題を提起するなど、アラビア語の現代的変容に大きな影響を与えている。マグリブ地域 (モロッコ) から発信された『ガニー』は、実

はこうした湾岸の勃興による知的生産の成果の一つでもある。

では、ここからは『ガニー』の特徴を中心に、優れた点や改善すべき点などをより具体的にみていくことにしよう。

まず疑問になるのが、ネット版と紙版は違うのかという点である。これについては、先述のように紙版の『ガニー』刊行にあたっては、ネット版を元に修正が加えられており、記述が双方で異なっている点が数多く見受けられる。例えば、**خُبَارِي** (野雁〔ノガン])の複数形は、ネット版では「ラー」の母音が「イ」で

**خُبَارِيَاتٌ**となっているが、正しくは、紙版のように母音は「ア」で**خُبَارِيَاتٌ**である。また**مُفْرَاجٌ** (やかん)は、ネット版では**مُفْرَاجٌ** (語頭の「ミーム」が道具名詞のパターンで「イ」の母音)となっているが、紙版では「ミーム」への転換前(「パー」から)の単語**بُفْرَاجٌ** (パレスチナなどでは**بُكْرُجٌ**)を継承し、語頭を「ウ」に修正している。他にも、**بِرْنَامَجٌ** (プログラム)は、ネット版では語根に関する記載はないが、紙版では√**ب ر م ج**という語根情報が追加されている。同様に**مِينَاءٌ** (港)のように、ネット版では語根情報は出ていないが、紙版では√**م ي ن / و ن ي**の2説をあらたに記載している例や、**جَاهٌ** (力、権威)のように、ネット版では√**ج و ه د**を語根としているが、紙版では√**ج و ه د / و ج ه د**という2説を採用している例などもある。また、**فُرُحٌ** (虹)の属格名詞**فُرُحٌ**について、ネット版では**فُرُحٌ**で3段変化の語末母音になっている

が、紙版では2段にしている(古典の一説によると、悪魔の固有名、またはムズダリファ(マッカ)の山の固有名ゆえに2段)。また、**مَنْبُودٌ** (捨て子)の項目では、**وَلَدٌ مَنْبُودٌ**という表現の説明をネット版では**وَلَدٌ زَيْنًا الَّذِي تُلْقِيهِ أُمُّهُ عَلَى قَارِعَةِ الطَّرِيقِ** (不貞関係を持った母によって道に捨てられた子)とイダーファ構成の前の名詞にタンウィーンが付いているが、正しくは紙版の**وَلَدٌ زَيْنًا تُلْقِيهِ أُمُّهُ عَلَى قَارِعَةِ الطَّرِيقِ**でタンウィーンなしである(さらに非限定の先行詞による関係節に変更している)。さらに、**شَيْبِرْقٌ** (雌猫の子)のようにネット版にはなく、紙版で新たに採用された語彙もある(ただし語義の説明(**وَلَدٌ الْهَرَّةِ**)は、『ラーイド』からの引き写しと思われる)。このように、ネット版からの修正や補完箇所は数多く散見され、そのことから、紙版『ガニー』を利用する価値は大いにあると言えよう。

また、『ガニー』の長所として筆頭に挙げられるのは、見出し語はもちろん、収録語彙のはほぼすべて、そして例文や古詩の例証に至るまで母音記号がしっかりと付されている点である。これは著者のガニーが辞書編纂において大切にされた要素で、特に評者も含めた外国人学習者がアラビア語辞書に求めるものの一つこそ、この母音記号に関する正確な情報である。『ガニー』では、名詞／形容詞が3段変化なのか、2段変化なのか、あるいは外来語の母音記号についても確認することが可能となっている。例えば、**فَاصِعَاءٌ** [複数: **فَرَاصِيعٌ**] (モグラの掘った穴)が3段か2段かを確認したいとき、『ガニー』では見出し語から一目瞭然、2段であることが分かる [vol.3, p.2509]。一方、『ワスイート』の場合、見出し語の名詞／形容詞に定冠詞が付いているため、語末の母音記号からは2段か否かを判断できず(定冠詞が付くことで2段／3段ともに語末がタンウィーンなしの「ウ」になってしまうため)、極めて不便と言わざるを得ない。

次に長所として挙げられるのが、語根配列ではなく綴り配列を採用したことである [intro. pp.13-14]。後述するように、これには一長一短あるわけだが、初学者にとってのみならずその利点は多い。一つは、語根の判断が難しい単語に即座にアクセスできるということである。例えば**وَقِيَ** √**ا ت ق ي** ((神)を畏れる)などは、初学者にとって語根が見つけにくい代表的な例だが、『ガニー』では、「ター」のシャッドもばらすことなく、純粋に書かれた綴りのまま、**アリフ／ター／カーフ／アリフ・マクスーラ** (アリフの扱い)という順番で引けばいいだけなので、特段難しいことはない [vol.1, p.44]。さらに、『ガニー』の優れたところは、ほぼすべての見出し語に語根情報を与えている点である。綴り配列の利点を生かしつつ、アラビア語のエッセンスである語根や形態パターンを重視する学習辞典の提示法は、学習過程によっては非常に有効に作用する可能性を示唆している(アラビア語-英語辞書のバアルバキー著『マウリド』は、綴り配列の定番で、手軽に引ける現代辞書として名声を獲得しているが、語根情報は全くない)。

そして『ガニー』のもう一つの長所が、動詞について自動詞なのか他動詞なのか、あるいは前置詞を必要とするのかという点に関する記述、なおかつ、どの単語との組み合わせで使うのかというコロケーションに関する記述である。これらもまた、学習者が辞書に特に求める情報要素である。ALECSOの『アサー

スィー』は、この点が評価されていたが、それをはるかに超える分かりやすさが『ガニー』の辞書としての魅力である。例えば、『إِنكأ』という動詞は「～に寄りかかる」という意味だが、学習者が求める情報は、①語根が√**وكء**であるということ、②「～に」の部分に直接目的語を置けるのか、前置詞が必要なのかという情報、そして③未完了形の形 **يُنكئ** とマスダル(動名詞)の形 **إِنكَاء** である。②については略記 [ف:خ لام ح] (فاعل على المفعول) 「5文字からなる自動詞、または前置詞を必要とする動詞」の略)と例文で提供してくれる。また③については、関連語彙をすべて綴りと共に掲載しているため、ハムザの綴りで迷うことさえも解決してくれる。『ガニー』では、『إِنكأ』には自動詞の他に、前置詞 **عَلَى** が必要であるという情報だけでなく、『إِنكأ عَلَى المَحْدَةِ (クッションにもたれかかる)』という例文、『إِنكأ عَلَى العَصَا (杖を使う)』という例文という具合に、名詞との組み合わせを提示することで、その動詞の使い方と意味が分かるよう配慮がなされている。また、例証については、レバノン出身でマフジャール文学を代表する文人ジュブラーン・ハリール・ジュブラーン (1883–1931) とバグダード出身のアブー・ハイヤーン・タウヒーディー (922–1023) という時代も地域も異なる2人から一例ずつ引用している [vol.1, p.45]。

このように例証の多さも『ガニー』の優れた特徴として挙げることができる。先に数については述べたが、クルアーン、ハディースのほか、異なる時代・地域の文人・詩人、ジャーナリストなど総勢400人強からの例証(7354)を採用している。人物については、序文の最後 [intro. pp.39–44] に、生没年(西暦とイスラーム暦)、出身国・地域に関する情報が詳細にリストアップされていて、確認する際に便利である(ただし典拠となっている著作名までの情報はない)。

これまでのアラビア語辞書の多くは、引く側に語形変化や形態の事項についての予備知識があるという前提で編まれている。そのため、語義の説明は詳細であっても、学習の配慮がきめ細かく行き届いているということではなかった。それとは対照的に『ガニー』は、語根情報、未完了形・マスダルの形(綴り)をすべての見出し語の動詞に載せるという配慮を施した。なおかつ、行為者名詞(能動分詞)・受動名詞(受動分詞)、形容詞などの見出し語には、ター・マルブータ(ة)によって女性形になることを併記した。さらに、特筆すべきは、**قَاضٍ** (法官) や **عَالٍ** (値段が高い) のような語末欠陥名詞(イスマ・マンクス)については、限定されると **الْقَاضِي** や **الْعَالِي** のように「ヤー」が顕在化することを、見出し語として提示、並列させることで明らかにしている点である。

また、語彙によっては複数形を見出し語としている点も、評価に値する。一例として、母音記号のないテキストなどで **حواشك** という知らない単語に出会ったと想定してみよう。母音記号が振っていなければ、語末の「カーフ」が人称代名詞にも見えてしまうし、「シーン」がシャッダであるとも予測しうる。そのため学習者が辞書を引くときには、語根配列であれば、√**حشك** √**حشش** √**حوشك** √**حوشك** などを何度も道に迷うかのごとく彷徨ってしまう可能性が十分に考えられる。**حَوَاشِكُ** は「異なる方向からの風」を意味する **حَاشِكَةٌ** の複数形である [vol.2, p.1381]。『ガニー』の場合は、複数形が見出し語として多く採用されているため、**حواشك** で引くと、綴り配列であることも相まって、思いのほかこの単語に容易にたどり着くことが可能となっている。

このように、複数形を見出し語として採用していることに加え、その各項目では「～の複数形」という説明で済ませることはなく、あらためて語根などの語彙情報と語義を記述し、その複数形を用いた例文を載せている。こうした配慮は『ガニー』の最大の特徴であり、引く側に立った丁寧な辞書であることを読者に強く印象付ける。主だった複数形の見出し語としては、**أَحْلَاجِي** (なぞなぞ)、**إِخْوَانٌ** (同胞、兄弟)、**إِخْوَةٌ** (同胞、兄弟)、**تَوَابِلٌ** (香辛料)、**جَحَافِلٌ** (大軍)、**حَاجِيَّاتٌ** ([日常の]必需品)、**حَوَائِجٌ** (必需品)、**رُحْلٌ** (遊牧の)、**رِيَاضِيَّاتٌ** (数学)、**شَوَائِبٌ** (不純物、欠陥)、**شَوَارِدٌ** (難解語)、**شَوَارِعٌ** (道、通り)、**صَادِرَاتٌ** (輸出品)、**صَغَائِرٌ** (小罪)、**مَجَامِعٌ** (アカデミー)、**مَرَاجِعٌ** (参考文献)、**مُحَقَّرَاتٌ** (些細な悪事、小罪)、**مَرَاجِلٌ** (段階)、**مَشَارِقٌ** (東方アラブ地域)、**مَشَاعِرٌ** (感情)、**مَصَابِيحٌ** (ランプ、灯り)、**مَصَادِرٌ** (典拠、一次資料)、**مَغَارِبٌ** (西方アラブ地域)、**مَغَارِبِيٌّ** (西方アラブ地域のニスバ、マグリブ地域出身の人たち)、**مَفَاصِلٌ** (関節)、**مَلَابِسٌ** (服)、**مُواصَلَاتٌ** (交通機関)、**نَاسٌ** (人々)、**نِسَاءٌ** (女性)、**نِسْوَانٌ** (女性)、**نِسْوَةٌ** (女性)、**نَوَاصِحٌ** ([文法用語] 対格作用を有する動詞や辞詞)、**نَوَازِلٌ** (先例のない新たな問題に関する法学裁定)、**نَوَاصِبٌ** ([文法用語] 未完了形接続法を導く辞詞)、**نَوَافِدٌ** (窓)などを挙げるができる。

同様に、欠陥・形容詞・色などを表わす **أَفْعَلٌ** 型についても、その女性形である **فَعْلَاءٌ** 型の語彙を別個に見

出し語として採用し、語根情報や用例を載せている。代表的な例としては、**بَقَعَاءُ** (斑点のある)、**حَدْبَاءُ** (背の曲がった)、**حَمْرَاءُ** (赤い)、**حَمَقَاءُ** (愚かな)、**صَمَاءُ** (耳の不自由な)、**عَرَجَاءُ** (片足の不自由な) などがあり、単に男性形と同じ意味の女性形というだけでなく、女性形の用法としてもコロケーションを重視し、例えば、**حَدْبَاءُ** については、**سِنَّةُ حَدْبَاءُ** (高齢) を、**صَمَاءُ** については、**أَرْضُ صَمَاءُ** (乾いた大地) を、さらに **بَقَعَاءُ** については、**سِنَّةُ بَقَعَاءُ** (不作の年)、**أَرْضُ بَقَعَاءُ** (小石の大地) などを挙げている。

また受動態でよく使われる **تُؤَفِّي** (亡くなる) や、**أَضْطَرُّ إِلَى** (~せざるを得ない) などの動詞については、通常の完了形とは別に、受動態の完了形で見出し語を立てている。こうした点も、『ガニー』が重点を置く「綴り配列による語義・表現の独立性」[intro. p. 13] を反映した試みとして高く評価できよう。

このような丁寧な作りは、ちょうど『パスポート初級アラビア語辞典』(本田孝一・石黒忠昭編、白水社1997)に通じるものがある。アラビア語-アラビア語辞典について言えば、学習者が必要とするであろう情報をここまで手取り足取り上手く取り入れた大型辞書は、アラブ世界において初の試みと言ってよいだろう。

ここで、改善点に移る前に、著者であるアブドゥルガニー自身が言及していない『ガニー』の最大の特徴の一つとして、このような大型の学習辞典がマグリブ地域(西方アラブ地域)のモロッコから発信されたという点に注目してみたい。

現代アラブ世界におけるアラビア語研究の動向を概観すると、20世紀中葉にかけてアラブ諸国にアラビア語アカデミーが設立され、シリア、イラク、そしてエジプトを中心に文法改革や専門用語の制定、正書法の整備といった知的活動が展開された。現代における辞書編纂についても、同じようにマシュリク地域(東方アラブ地域)が中心であった。特にカイロ・アラビア語アカデミーの牽引力の強さは60年代末まで顕著で、その流れで刊行に至ったのが『ワスイート』(1960-61年刊行)である。そのため、辞書における語彙の選択や語義の説明はマシュリク地域が基準となり、言うまでもなくエジプトにおける語彙が現代アラビア語の規範形成において影響力を持った。この点は、評者が分析の対象としている「現代アラビア語(フスハー)の地域差」という重要なテーマに関係する。例えば、『ワスイート』では、**خَرْطُوشُ** (カルトゥーシュ: ヒエログリフを施したペンダント) や、**أَلْحَمَاسِينُ** (ハマースィーン: 春先の砂嵐)、**كُشْرِي** (コシャリ)、**مَفْرُوكَةٌ** (コーンミールから作られた粒状の粉食(クスクスの類)をミルクとバターで覆い砂糖で甘くして食べる菓子料理)、**أَبُو فَرْوَةِ** (栗) などが見出し語/関連語として採用されているが、明らかにこれらはエジプト的語彙である。

それでは翻って、『ガニー』はどうだろうか。全体的に言えば、『ガニー』には、マグリブ方言を特に採用するという明確な方針があるということはなく、また地域性の強い語彙を積極的に取り入れているという印象は強くはない。例えば、**بَنِينُ** (bnīn 美味しい) や、**شَبَاكِيَّةٌ** (シュッパーキーヤ: モロッコの伝統菓子)、**أَرْكَانُ** (アルガン)、**إِزْدِيَانُ** (誕生)、**بِرَافُ** (bazzāf たくさん) といったモロッコを象徴するような定番の語彙・表現は、辞書に収録されていない。しかし、そのような中でも明らかにマシュリク地域の『ワスイート』や『ムンジド』とは異なる語義、モロッコの文化的背景を反映した記述、また地域性の強い語彙を見つけることができる。以下に、『ガニー』から抽出した例をいくつか挙げてみよう。例えば、**إِشْهَارٌ** (広告、宣伝)、**أَطْلَسُنُ** (アトラス山脈)、**بَلْعَةٌ** (モロッコの伝統的な革製のスリッパ)、**تَمْعَرَبٌ** (マグリブ化していく)、**خَرِيرَةٌ** (モロッコの庶民的スープ)、**دُلَاغٌ** (スイカ。『ムンジド』では「カタツムリ」の意味)、**رُحْلٌ** (النُّوَابُ الرُّحْلُ 所属政党を転々と変える議員[最近ではチュニジアでも使われている])、**زُرْبِيَّةٌ** (絨毯。『ワスイート』『ムンジド』では「クッション」の意味)、**زَلْبِيَّةٌ** (モザイク模様のタイル[フェズ産が有名。挿絵あり])、**زَنْقَةٌ** (路地、小道。「ヌーン」をスターンとしているのは『ガニー』のみ。他の辞書では「ア」の母音で **زَنْقَةٌ**)、**صَوْمَعَةٌ** (ミナレット)、**غَاسُولٌ** (泥石鹸)、**فُقْطَانٌ** (女性用のロングドレス)、**كِرَاءٌ** (レンタル。『ワスイート』では「賃借料」の意味)、**كِرَاسِيٌّ** (ウラマー)、**مُتَلَجَّاتٌ** (ジュース屋)、**مَخْبِزَةٌ** (パン屋。モロッコではターマルブータ付き)、**مَخْدَعٌ** (電話ボックス)、**مَسْنُودٌ** ([窓・戸などが]が閉まっている)、**مَصْبِنَةٌ** (クリーニング・アイロン屋。『ワスイート』『ムンジド』では「石鹸工場」の意味)、**مَعْنُونَسٌ** (パセリ)、**مُنْتَسِبَةٌ** (チェック機構)、**مُفْرَاجٌ** (やかん)、**مَلَّاحٌ** (ユダヤ人)、**أَوْرَاشٌ** (工房、ワークショップ)、**وَرَشَةٌ** の複数形でこのパターンを採用しているのは『ガニー』のみ)などは、マグリブ方言の影響や地域的文化性が観察される語彙である。

これまで述べてきたように、『ガニー』は現代アラビア語研究に加え、学習辞典としても利用価値が高く、大いに活用すべき良書であると思われるが、それでもいくつかの問題点や改善すべき点はある。

まずは、サイズと分冊の形態である。装丁や紙質は評価できるのだが、汎用性ということ言えば、シャモア色の上質紙によるハードカバー4巻本の重さは必ずしもプラスとは言えない。日本の辞書で普及している薄紙印刷紙の利点を想起するとその違いは明らかであろう。また4分冊になっているため、ある単語から別の単語を違うページに飛んで調べる必要が出てきた際に、他の分冊が必要になることも多く不便である。1巻本にするのは無理であっても、せめてレインの辞書(The Islamic Texts Society版)のように2巻本ぐらいが使いやすいと思われる。

配列方式については、語根配列と綴り配列(アルファベット順)で一長一短の部分もあるだろうが、後者の場合、語根を知らずとも引ける敏捷性と引き換えに、同語根の語彙が一箇所にまとまって出ていないということから生じる問題や弊害がある。例えば、**طَسَّاسٌ** という単語を引くと、**صَانِعُ الطُّسُوسِ وَبَائِعُهَا** (〇〇を作る人やそれを売る人) という語義がある [vol. 3, p. 2156]。そこで〇〇にあたる **طُّسُوسٌ** を引くが、見出し語がないため、その時点で迷子になってしまう。かろうじて、**طَسَّاسٌ** と同ページに、**طَسٌّ** という名詞が見出し語にあるが語義の記述はなく、複数形が **طَسَّاسٌ** と **أَطْسَاسٌ** であるという情報のみで、**طَسٌّ** と **طَسَّتٌ** を見よという指示が続く。このように、綴り配列では、ある複数形の単数形が分からない場合などには、求める単語にたどり着かず右往左往する事態が生じうる。一方、語根配列の辞書であれば、**طس** の項目を引くことで、上に出てきた単語は同語根であるため、探し回ることなく、**طَسٌّ** (真鍮製の容器) の複数形が **طُّسُوسٌ** であるという情報を得ることができる。

ある程度アラビア語の学習が進み、語根を見抜く力や単語の形態(パターン)が身に付いてくると、語根を基軸に有機的に広がる関連語や、その意味の展開を学んでいくことは楽しい作業となる。例えば辞書で、**سَلَامٌ** (平安) と **إِسْتِسْلَامٌ** (降伏) や、**ثَمْرٌ** (果実、実) と **إِسْتِثْمَارٌ** (投資)、**تَلَجٌ** (雪、氷) と **أَتْلَجٌ** (喜ばせる) のような単語を、それぞれ同語根の単語として同じ語根の項目から学べることは、アラブの思考や言語文化を理解する上で有益であり、語根配列が合理的であることを感じる瞬間でもある。

次に指摘すべき点は、『ガニー』では語彙の説明に多くの略記を使用しているため、辞書を使いこなすには、それに慣れていく必要があるということである。略記の元となっている用語はアラビア語であり、その意味が理解できていなければ、せっかくの辞書の利点を活用することができない。また、周知のように派生形概念や仕組みは、アラブ伝統文法と西欧文法(外国人学習者の多くが学ぶ枠組み)で異なっており、アラブ式では「4文字からなる動詞」「5文字からなる動詞」「6文字からなる動詞」という分類がなされている。この方式は、つまり3語根に何文字が追加されているかを基準に成立しているため、派生形第5型、6型、7型、8型、9型ともに2文字追加による「5文字からなる動詞」で同じ分類になってしまう。略記とともにアラブ伝統文法の用語に慣れる必要はあるが、一方で派生形の欧式分類(第2型~15型)は、語根からの有機的広がりを数学的に理解する仕組みとして学習上有益であり、その点も意識・補完しつつ『ガニー』を使われない。

その他、『ガニー』に関する訂正や問題箇所、特に気が付いた点などを以下に箇条書きで記す。

#### [訂正・修正]

- ・鳥類に関する略記で (طي) (حو) (حي) の混合が見受けられる
- ・魚類の単語に (سم) の略記が使われているが、略記リストになし
- ・**إِتْكَأٌ** (寄りかかる) の例文: **إِتْكَيْءٌ** → 正しくは **إِتْكَئٌ** [ハムザの置き方を訂正]
- ・**جَلَسَ** (座る) のマスダルの一つ: **مَجْلِسٌ** → 正しくは **مَجْلِسٌ** [「マスダル・ミーミー」(語頭ミームによる動名詞) なので第2語根の母音は「イ」ではなく「ア」]
- ・**حَرِيْتُ** (魚の一種) の略記: (اسم) → 正しくは (سم) [アリフは不要]
- ・**حَسْرَةٌ** (悲嘆) の例証の典拠: (ع. م. بنجلون) と記しているが、巻頭リストになし。これはおそらくモロッコ出身の作家 **عبدالمجيد بن جلون** (1919-1981) と思われる
- ・**حَوَائِكُ** (様々な方角からの風) の語根: **حوش** → 正しくは **حشك**
- ・**عَيَانٌ** (実際に目で見ること) の例証: **لَيْسَ الْخَبْرُ كَالْعَيَانِ** (百聞は一見に如かず) を諺としているが、正しくは

ハディース

- ・ كِنَافَةٌ (クナーフア: アラブの伝統菓子): → 正しくは كِنَافَةٌ [カーフの母音は「イ」ではなく「ウ」]
- ・ مِرْوَحِيَّةٌ (ヘリコプター) の項目の同義語: طَوَافَةٌ → 正しくは طَوَافَةٌ [シャッダの位置を訂正]
- ・ مَشْرَبِيَّةٌ (マシュラビーヤ): 挿絵が「格子窓」「格子状の窓枠」を描いていない
- ・ مَنَاخَةٌ (気象学) の語根: √ م ن خ → 正しくは √ ن و خ [同語根の مَنَاخٌ (気候) の語根は √ ن و خ となっている]
- ・ مُنْتَهَى (極限) / قُرَى (pl. 村) などのアリフ・マクスーラを語末とする単語: → 正しくは مُنْتَهَى / قُرَى [「ア」のタンウィーン的位置をアリフ・マクスーラの一文字前に訂正]
- ・ نَعْلٌ (サンダル): 挿絵が革靴になっているが、革製のサンダルのほうが実用例としての確である
- ・ هُوَلَاءٌ (この人たち): → 正しくは هُوَلَاءٌ [ハーの長母音「アー」をミニ・アリフで]

#### [補足・追加など]

- ・ اِنْتِخَابَاتٌ (pl. 選挙): 単数形 اِنْتِخَابٌ の見出し語の語義と用例として複数形の「選挙」が挙げられてはいるが、「選挙」の意味では通常、複数形が用いられるため、別途 اِنْتِخَابَاتٌ の見出し語があれば分かりやすい
- ・ بَيْضَانٌ (pl. アラブ系、肌の白い人々): اَبْيَضٌ の複数形という記述なし
- ・ حُلُوفٌ (豚): マグリブ諸国でよく使われる語彙なので採用すべき。語源にはアマズィグ語(ベルベル語)説とアラビア語説があり、後者の هُلُوفٌ は見出し語となっており「豚」の語義が出ている
- ・ خَلِيفَةٌ (カリフ): 男性名詞という説明があればなおよい
- ・ حَضْرَاوَاتٌ (pl. 野菜): 見出し語になし
- ・ رِيَاضٌ (冠詞付きで「リヤド」(サウディアラビアの首都)の意味が挙げられているが、رَوْضَةٌ (庭園、庭)の複数形という記述があればなおよい。また、語義にはマグリブ用法としての「モロッコの伝統的な邸宅様式」「古い邸宅を改装した宿」の意味もほしい[この意味では単数形]
- ・ صَحْرَاوِيٌّ: 語義にさらに(南部のゲルミームやダフラ、ラウユーンあたりの)「ハッサーニーヤを母語とする人」の意味がほしい
- ・ صَغَائِرٌ (pl. 小罪) は見出し語にあるが、كَبَائِرٌ (pl. 大罪) がない
- ・ صَمَاءٌ (pl. 耳の不自由な人) は見出し語にあるが、عَمْيَاءٌ (pl. 目の不自由な人) がない
- ・ طَرَّةٌ (解説、欄注): 見出し語になし
- ・ طُفُوسِيٌّ (طُفُوسٌ のニスバ) が見出し語となっているのであれば、طُفُوسٌ (pl. 儀式、慣習) がまず見出し語にあるべき
- ・ قَبْطَانٌ (船頭、キャプテン): 複数形 قَبَاطِينٌ، قَبَاطِينٌ が出ていない
- ・ كُنَاسٌ (小冊子、ノート、教本): 見出し語になし
- ・ مَشْرُوعٌ (計画、プロジェクト): 複数形として مَشَارِيعٌ の他に、現代用法で使われる مَشْرُوعَاتٌ も採用してほしい(『ハンス・ヴェーア』の辞書には記載あり。例えば、同じパターン of مَوْضُوعٌ (主題、テーマ) については、『ガニー』でも複数形を مَوَاضِيعٌ と مَوْضُوعَاتٌ の2つを採用している)
- ・ مَقْفُولٌ (閉まっている): 見出し語になし
- ・ مَلَأُنٌ (一杯の、満ちている): 見出し語になし
- ・ مُوَاتٌ (喜ぶべき、好ましい): 見出し語になし
- ・ وُجْدٌ: 完了形受動態で見出し語になっているが、「～がある/いる」の意味では未完了形受動態が用いられるので、يُوجَدُ の見出し語があればさらに分かりやすい
- ・ هَوَامِعٌ (pl. 流れ落ちる[涙]): هَامِيعٌ/هَامِيعَةٌ の複数形という記述なし
- ・ 湾岸系語彙に弱い: 例えば、مِثْلَحٌ [男性が羽織る薄いガウン = بَيْسْتٌ]、نَوْخَةٌ (船頭、キャプテン)、هَجْنٌ (ラクダレース) など湾岸文化に必須の単語が採用されていない

アラビア語-アラビア語辞典を使い慣れることは、アラブ文化やアラビア語学の伝統に触れることでもある。『ガニー』は、そうした世界に飛び込んでいくことを目指す学習者や研究者が、語根配列に慣れる前から思い切って使うことのできる革新的な現代辞書と言える。『ガニー』が採用した綴り配列は、語根のシステムを無視するものではなく、むしろ単語の語根を意識させる工夫の結果と判断に基づいている。引く側の

立場に立った丁寧な記述や編纂方法は、『ガニー』の最大の特徴であり、より多くの学習者や研究者に活用されるべき良書であろう。

日本では流通や入手方法に課題もあるだろうが、「ハンス・ヴェーア」の辞書一辺倒であり英語を介してアラビア語を学ばなければならない現状に、一石を投じる貴重な学習辞典が世に出たことを素直に喜ぶたい。同時に、いまだ日本に本格的なアラビア語-日本語辞典がない状況を真摯に受け止め、学習ツールの充実とさらなる教材開発を進めながら、今後の研究活動を拡充していきたい。

本稿は、JSPS 科研費（若手研究 B「湾岸アラブ諸国の勃興による現代アラビア語の変容と国際化」課題番号：15K16579）による研究成果の一部である。

(竹田 敏之 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任准教授)

---

**ガザリー、中村廣治郎訳註『哲学者の自己矛盾——イスラームの哲学批判』（東洋文庫 867）平凡社 2015年 378頁**

本書は、イスラーム思想史上最大の思想家の1人と評されるアブー・ハーミド・ガザリー (Abū Ḥāmid al-Ghazālī, d. 1111) が著した哲学批判書の翻訳である。翻訳を手掛けられた中村廣治郎氏は、ここで紹介するまでもなく、長年にわたり日本のイスラーム研究を牽引し、ガザリーの宗教思想を中心に研究を続けてこられた方である。東京大学、桜美林大学をご退職後も、精力的に研究発表や執筆活動を継続しておられる姿には、尊敬の念を抱かずにはいられない。それと同時に、評者自身、後に続く世代が一層努力しなければとの思いを強くする次第である。

ガザリーと哲学との関係については、中村氏が簡潔ながらも丁寧に紹介している通り、ガザリー研究においては主要なテーマの1つとなってきた [ガザリー 2003: 191–200; 2013: 465–469; 中村 2002: vii–ix など]。すなわち、神学者の立場から哲学を批判したガザリーは、しかし同時に哲学の影響を受けており、その哲学受容はいかなるものであったのか、という問題である。この問題について本稿で詳述することは控えるが、ガザリーが哲学を批判するために著したのが本書『哲学者の自己矛盾 (*Tahāft al-Falāsifah*)』(以下、『矛盾』と略記)であった。ガザリーは本書を執筆する前に、批判対象となる哲学説を十分に理解するべく『哲学者の意図 (*Maqāsid al-Falāsifah*)』という作品も著している。後には、ガザリーの『矛盾』への反論書『矛盾の矛盾 (*Tahāft al-Tahāft*)』が哲学者イブン・ルシュド (Ibn Rushd, d. 1198) によって著された。『矛盾』の翻訳が刊行されたことによって、これら一連の著作が『矛盾の矛盾』については抄訳ではあるが日本語で読めるようになったわけである<sup>1)</sup>。このことはイスラーム思想に関心を持ち始めた初学者は勿論、研究者にとっても、きわめて有益であると考えられる。

ガザリーによれば、「知性と聡明さにおいて、並の人間とは異なると内心で思っている多くの人々」(p. 16)、つまり当時の哲学者たちは、「イスラームの義務を無視し、礼拝の勤めや禁止事項などの宗教的儀礼行為を軽蔑し、聖法上の義務や規範を軽視し、その禁止や抑制に従わない」(同) でいたという。彼らの不信仰の原因は誤った哲学説に騙されたためであり、そのような哲学説の誤り、危険性や欠陥を明らかにしようとして、ガザリーは本書の執筆に取りかかったという。但し、併せて次のようにも述べている。

そもそも彼らが模倣しようとするこれらの哲学の領袖たちは、彼らが非難されているような聖法の否定とはほんらい無関係であり、彼らは神を信じ、その使徒たちを真実としていることが確認されている。ただ彼らは、これらの根本信条以外の些末的な事から誤りを犯し、正しい道を自ら踏み外し、また〔他人をも〕そうさせていたのである (pp. 18–19)。

哲学者たちの全てが、直ちに批判の対象となるのではないのである。『矛盾』の中には、「イブン＝スィー

---

1) 各著作の翻訳書については、稿末の文献表を参照のこと。なお、『矛盾の矛盾』については、田中千里氏が後述する第1問題の始めと第17–20問題を、竹下政孝氏が第3問題をそれぞれ訳出している。